

序にのこす

沈黙した諷諭

— 小川国夫 —

長 野 隆

——塗り絵をはじめたばかりの子供が、うずくまって何やら考えこんでいる。彼は、色の選択に迷っているのだ。パレットの中を覗いてみても、どこにもそれが見あたらない。

思考が既成のものでないことを、我々は文体と呼ぶ。彼の経験した初めての衝撃は、自己の文
体の発見にすぎない。

文体がまさにそこにあるという事実を、我々は容易に明示することができない。文体を覗こうとすれば、速座に言葉は浮足たち、騒ぎはじめ、紙面の背後に隠れこもうとするだろう。文体を、産み、操ろうとする者の切なる試みは、いわばこの種の鬼ごっこに勝利することだ。追う者も逃げる者も彼自身である、という事実ほどけなげなことはない。かなしむべきは彼の不幸ではなく、彼の意欲そのものだ。

折るにやうな
11/12にやうな

十は...

折るにやうな
11/12にやうな
十は...

ここに*

と書いてある。

折るにやうな

小川国夫は、物語の創造力というものに不審をいだいた小説家の一人だ。彼の「表現というものの対する諦めは、他に類を見ない。そのうえで表現に向かい合うところに、彼の想像力は働きつづけた。彼はむしろ愛するものに対して孤独に禅を組み、祈りつづければよかった。誰も彼を見る者がなければ、彼は幸福であつた筈だ。しかるに彼が表現をものしたとき、彼は己が信じる愉しみを奪われる危惧を感じた。彼は心から畏怖したのである。

彼は、言え、書くべきことは何もなかった。自己の裡を覗けば醒くほど、あの祈りにもまして自己を制圧し自己を魅了するものは何もなかった。ただあつたのは、表現という魔物を手に、己が秘密を他人に知らしめる禁忌に直面した不安と、高鳴る鼓動であつた。彼が表現し得たのはそれだけであつたし、またそれは彼にしかないものであつた。

彼は、文章の活々とした脈絡を好まない。それがみずから活動し、みずから生成することを嫌う。活きたるものは常に醜い。彼にとってこの醜さは、自己そのものにかかわる問題であつたら。彼は文脈に沈黙を求めた。例の得体の知れぬ不安と高鳴りに対し、列を整え、額突くことを強いた。「折り」はあくまで静謐に、そして重くあるべきであつた。

人としての

彼は独房に微光が来ると起きて、ゆかに指でなにか書いていた。

いつの間にか夜は明け放たれていた。兵隊が来た。そして、一人が、うずくまっている彼に——起て、

彼が立ち上ると、兵隊は彼の足元にしゃがんだ。足枷をはめるのだ。はめ終ると、兵隊は剣を抜いて、彼の両足の親指の爪をはがした。その日の最初の血が流れた。血は廊下の灰色の石の上では黒っぽかった。そして監獄の門のひなたでは赤かった。つめかけた群衆は静まった。

——「枯木」——

イエス（彼）が人であつてはなるまい。しかし「彼」は人の手にかかり、人の血を流した。聖なる人のいたみは、ひたすら静まりかえっている。

ひみ

*

小川国夫は無論これを描こうとはしなかった。表現に合掌を強いた。ただである。

ひの

——子供が向かいあつて、あやとりをしている。彼等は見ることのできない空間に形を求めている。手にした形は、ほんの一瞬彼のものになる。

ひ

